第３回関西スペイン語教師の集い
(III Encuentro de profesores de español en Kansai)
2012 年 2 月 19 日（於：関西学院大学梅田キャンパス）

テーマ：「Nueva Gramática de la Lengua Española（『スペイン語新文法』―名詞句の観点から」

Taller 4 グループディスカッション「名詞句に関する知識」

スペイン語学が専門の参加者を最低 1 名含む 3 人程度のグループに分かれ、おおむね、次の指針に従い、話し合いが行われた（40 分）。その後、各グループが話し合った内容を全員に報告した。

指針
・正直言って、尋ねられると困るテーマ…参加者の経験から

・教科書や進度の関係などから、教えたり教えなかったりする項目があると思われるが、何を教えたら「名詞句」を教えたと言えるのか　…教授内容、方法の検討

報告の概要
グループ１
いろいろな話が出た。きかれて困った経験としては、冠詞の用法をきかれる時説明しづらいし、教師自身にとってわからない用法もあることである。試験の際、学生が定冠詞の使い方が不自然な場合があるが、判断しづらい場合は文法的に合っていたら OK とせざるを得ない。学生は、試験の点数にこだわる際、訳語や語の区別に敏感になる。日本語の「その」が el /ese のいずれにも対応しうるので、この２つの語の意味の違いについてよく尋ねられる。
教授内容については、実際に使用されるスペイン語と、授業、教科書といった制約のある授業で教えるスペイン語とにギャップがあり、それがジレンマになる。形式や並べ方を覚えさせることも問題であるが、解決の手立てとして、音読が有効だと思われる。たくさんの例文に接し、耳に残し、口に残すことが役立つ。

グループ２
名詞句に関する「尋ねられると困った」という経験は思いつかなかった。そもそも、質問があまりないためである。その中で、「libro は男しか読まないのか」「女性が読む場合は libra にならないのか」という、方向違いの質問が、名詞の性について発生することがある。（つまり、libro<本>は男性名詞なので、その本の想定された読者は男性である、よって、読者が女性の場合は性が変わって libra という形になるのではないか、という疑問）"Encantado/-a."を初回授業で教えると、語尾を発話者の（自然の）性別に関連づけ、「libro

は男が読むのか」と考えてしまうようである。

El libro の el を「ある」と訳す学生がいる。訳語をきちんと押さえないで、「限定詞（冠詞）が難しい」と嘆くパターンが目立つ。

教授内容については、「限定詞+名詞+形容詞」というデフォルトのパターンがマスターできれば、最低限教えたことになると思う。

話し合いのメンバーは、自らの授業実践で、次のような方法を取っている。

メンバー1：ある名詞と組み合わせるために、いくつかの形容詞を用意し適切なものを選ばせるという問題をたくさん学生に解かせている。

メンバー2：学生にとって親しみのある表現（日本語で持っている知識）として、「名詞+形容詞」の固有名詞(Costa Rica, Puerto Rico, Casablanca)を用いて教えている。

メンバー3：まずは学生にいろいろ表現を産出させ、関連要素を「隣接」させることができれば「達成」と捉える。

グループ３

名詞の性について、「なぜ男性（女性）なのか」と尋ねられることがあるが、日本語の漢字の音訓読みのように、はっきりした理由はない。学生は、意味だけがわかればよいと思って辞書をひくので、名詞を教える場合は、意味だけではなく性も認識させることが必要である。

縮小辞、増大辞について。名詞の一つの形として、良い意味が加わるときと、軽蔑などの悪い意味が加わるときがあり、統一的な意味を学生に教えにくい。冠詞の用法など、文法事項について、学生に聞かれるときがあるが、文脈がないとなぜ冠詞がつくのかつかないのかについては、１００％こうだとは言えない。コンテクストを考えなければならない。

「名詞句」については、名詞句というくくりでこれまで授業をしたことがないので、難しい。また、そういう文法用語を教えて学生がわかるのか疑問である。用語をどう教えるかを考えていく必要がある。

グループ４

日本語でもスペイン語でも同じ名詞句だが，同じ構造では表せない場合がある。例えば、「イワシを焼くにおい（音)」は、そのままスペイン語にはできない。よってこのような構造は日本人学習者にとっては難しいと思われる。同様に、名詞と形容詞をつなげる場合、日本語だと可能だがスペイン語では不可能な場合がある。これは中級以上になってくるとノンテイティブの教師にはわかりづらい場合があり，質問されるとその場で答えることができないことがあると思われる.

グループ５

文法を教える場合、全般として「だいたいこうだが、例外もある」という性質のものであることを明確に伝えることにより、初学者がルールに振り回されることが少なくなると思う。名詞の性の区別の仕方でも、先にそのことを伝えてから典型的なものを教えるのがよいだろう。名詞と形容詞の語順（「名+形」「形+名」）についても、「名+形」の順をデフォルトとして教える。このことと、"mucho+名詞", "buenos días" のようなフレーズの語順と

の矛盾で学生が混乱しないように、デフォルトの明示的教示と、フレーズ化された名詞句とは、時間をあけて別の教え方をするとよいと思われる。「スペイン語を教えた」と言える最低限の内容として明示的に教えるべきと思うのは、「冠詞+名詞」「無冠詞の名詞の用法」、基数詞（日付を言えるように３１まで）、所有・指示形容詞、そして、名詞の可算・不可算の区別。ただし、可算・不可算については学生が英語での区別を知っているかどうかによって、教える時の負担が異なるだろう。名詞句の補語の部分については、最初の段階では、"de+１つの名詞（固有名詞など）"（例：la Universidad de+地名、las siete de la tarde）くらいにとどめておいてよいと思う。